

教養と教養教育について

基盤教育機構准教授 武田 裕紀

1. はじめに

近年、教養教育の再構築が叫ばれているせいか、あるいは逆に反知性主義的な教養蔑視が猖獗を極めているせいか、教養をテーマとした本は屋上屋を重ねるかのようになく出版されています。もっとも、私はそういった本はなるべく読まないようにしているので、彼らが何を語っているのかよく知りません。読まないようにしている理由は、教養とは何かなどわざわざ考えたくないからです。とはいえそこには、教養とはそのような本を読んで何事かわかるようなものではないという、ある程度の熟慮に基づいた信念もあります。

そのような人物が、事の成り行きとはいえ、教養と教養教育についての雑文を人に読ませようとするなど、なんとも滑稽なことではありますが、生来かつ職業柄、自己顕示欲の強い私は、この機会に、自分の専門分野の範囲内でいくつかの例を挙げながら、自分の考えるところの教養や教養教育について少々書いてみたいという気分が駆られました。そういうわけで、自分の気まぐれと自己顕示欲を何とか取り繕うために、以下の文章は、教養教育の歴史についてのちょっとした情報と、現代において求められる教養についてのエッセイ（試論）と定義しておきます。ここで言うエッセイとは、まさしくモンテーニュが『随想録（エッセイ）』というタイトルで使った意味でのそれ、すなわち「自己の判断力の試し（エッセイ=essais）」としての試論=私論、ということになります。要するに、自身が教養についてどのように考えているのか、自分自身をチェックしてみたいわけです。

2. 18～19歳に対する教養教育

教養教育については長い歴史があり、私たちはそこから多くのことを学ぶことができます。とはいえ、今回お話ししたいことは、大学における教養教育の起源となった「自由七科」についてはありません。というのも、古代に淵源をもち中世を通してその内容を随時変更していった自由七科は、それについて語るにはあまりにも広大すぎるし、そのうえ、基本的には15歳前後の少年に提供されたカリキュラムであって、その教育理念、カリキュラム構築、教育実践において、今日の高等学校のそれに近いところがあるからです。

そういうわけでここでは、もう少し時代を絞って16世紀から20世紀初頭まで、そして年齢的に

も 16～20 歳程度を対象とした「教養教育」であるレトリック級や哲学級を参照したいと思います。レトリック（修辞学）が今日あまり良い意味で用いられず「言葉の綾」と同義で用いられているのは、教育史におけるレトリックの歴史的重みに対するルサンチマンによるところが大きいはずで、十歳ごろから開始され、中等教育の総仕上げに位置づけられたレトリック教育は、その過度の技巧と、有無も言わずキケロなどの古典を手本とさせる権威主義的なやり方のせいで、数々の批判を浴びながらも、20 世紀の初頭まで中等教育に君臨し、20 世紀以前のヨーロッパの文物に見るような荘重な文体を生み出す母体となりました。19 世紀ロマン主義文学の流行以降、このような形式主義に対する風当たりがいつそう強まり、個人の内面を率直に語る簡潔な文体が好まれるようになった結果、ついにフランスでは 1903 年にレトリック級は廃止され、レトリックは教養教育の玉座から失墜します。

このヨーロッパでの動きはすぐさま日本にもたらされました。中心となったのは、鈴木三重吉などの在野の児童文学者でした。彼らは、それまでの漢文の伝統に基礎を置いた形式的な書き方教育を批判し、（日本流に解釈された）自然主義文学の理念にのっとり、子供たちに自由な発想で率直に自らの体験を語らせる「生活綴り方」を提案しました。この生活綴り方は、日本独特の道德教育と混交することで、いくつかの内容上の類型（読書による魂の成長や、自己を見つめることによる反省文など）を生み出し、国語教育における「作文」の基礎となっていきます。

この間ヨーロッパでは、レトリックに代わって、「ディッセルタシオン」という非常にコンパクトではあるけれども汎用性の高い論理的な作文技法が教育に取り入れられ、新たにリセの最終年度に設置された「哲学級」の主要なカリキュラムになりました。ところが日本では、なぜかそれに対応するメソッドが生まれませんでした。この重大な欠落は、日本語が東洋の島国における閉鎖的な言語であるという幸運によって、長きにわたって潜在的なものにとどまり続けていましたが、近年、ピサの国際試験においてようやく露わになり、汎用性の高い論理的な作文技法の教授が喧伝されるようになりました。外国の例に倣うならば、これは中等教育で身に付けるべきものではあるとはいえ、そして日本の初等・中等国語教育にもいくぶんの改革が見られるとはいえ、現状に鑑みると、やはり今のところ大学の初年度に集中的に教える必要がありそうです。

さて「哲学級」は、伝統的には大学の専門課程への準備級として位置づけられ、論理学（Logique）、自然学（Physique）、倫理学（Morale）、形而上学（Métaphysique）の四部門から構成されていました。論理学は学問の方法について、自然学はその方法によって明らかにされた世界のありようについて、倫理学はそうした世界において人間の占める位置と生き方について、形而上学は世界と人間の根柢について、それぞれ論じます。学問がいまだ未分化で有機的に結びつきあっていた近代以前であったからこそ可能な壮大な体系ではありますが、神学や医学の事細かで七面倒くさい学習に入る前に、学問の全体像を俯瞰しようという意図があったはずで、近代の大学において教養部が自然科学、社会科学、人文科学の科目群から構成されていたのは、この哲学級の理念の歴史的継承というところがあります。

この哲学級の充実は、近世に入ってから目を見張るものがあります。そもそも、神学部、医学部、法学部は、それぞれ聖職者、医者、官僚を養成するための職業訓練校のようなものであり、学士をとるための修業年月は17世紀には一年(博士は十年以上)だけでした。それに対して、例えば16世紀から18世紀に教育界で成果を挙げたイエズス会の学校では、哲学級の履修期間は三年(デカルトの場合では17歳から19歳)でした。この哲学級のカリキュラムが、たとえばアダム・スミスがモラル・フィロソフィの教授であったように、近代になって勃興した諸学問の母体となっていくます。17世紀から18世紀は、歴史的に見るとたしかに大学の停滞期に当たりますが、しかし近年の動向のようにとりわけ中堅・下位大学が職業訓練校化すると、皮肉なことですが、大学の専門課程はかつての大学がそうであったように一年でじゅうぶんであって、後の三年は教養教育に費やすことになるかもしれません。実務に勝る職業訓練はないのですから。

3. 人文主義者に倣いて

それでは教養教育の中身は如何にあるべきでしょうか。先ほど「汎用性の高い論理的な作文技法」を挙げましたが、私は新しい教養教育の体系的なプログラムを提示しようという野心を抱いているわけではありません。そのような能力を決定的に欠いているとからというのはもちろんですが、私自身が、「教養」に対して前時代的ともいえる崇拜の念をもっている一方で、その理念そのものに対してかなりの警戒心も抱いているからです。前時代的ともいえる崇拜の念は、親の影響があるかもしれません。実家には、中央公論の『世界の文学』が物心ついた時には全巻そろっており、両親からは「これくらい読んでおかないと教養を疑われる」と言われたからです。もっともそのシリーズのほとんどは、実際のところ、私が紐解くまで全く読まれた形跡がありませんでした。要するに、文学叢書が家具の一部になりうるということ、あるいはそのような売り込みをかける出版社がいること、その口車に乗る消費者がいるということ、このこと自体が、教養に対する信頼を証しているものであり、実はこうした権威主義がなければ「教養」は成り立ちえないのです。このことの裏返しとして、「教養に対する警戒心」があります。つまり教養はある種の権威主義と密接に結びついているのです。それだけではありません。上の例は単に私の両親の趣味(『世界の名著』ではなく『世界の文学』だった)という個人レベルの逸話ですが、公教育機関が、ある種の「教養」を「知らないと恥ずかしい」とばかりに奨励するならば、それはいっそう深刻な問題——おそらくは政治的な——を引き起こすことになるでしょう。というのも、「教養」の選択にはかなりの恣意があり、何かを選べばそこには必ずなにかしらの文化イデオロギーが介入せざるを得ないからです。このことは例えば、神武天皇を知らないのは日本人の教養として恥ずかしいとの理由で歴史教科書に掲載したいとする人たちが、それを推進する一部の政治家と密接につながっていることから明らかでしょう。

そういうわけでここで参照したいのは、「教養」を打ち立てた人たちよりも、むしろ「教養」に

対して異議を申し立てた思想家たちです。そして、「教養」に反逆した者が、「教養」を墨守する人たちよりも、深い「教養」に支えられていることもあるでしょう。私が言いたいのは、スコラ的伝統に対決したルネサンス人文主義者たちのことです。ここで、「教養」という語に相矛盾するわけではないけれども必ずしも両立可能というわけでもない二つの意味を与えていることにご注意ください。ある文化的前提のもとで習得すべき知識という意味での教養と、その文化的前提が成立する根拠についての洞察としての教養、であります。

「人文主義者」は、ユマニスト（仏）、ヒューマニスト（英）の訳語で、たしかに「人間主義者」よりはるかにましな訳語であるとしても、誤解を生じやすい言葉です。しかし、そもそも誤解を生じさせないような仕方では「人文主義者」を定義することは困難なので、その特徴を私なりに列挙するにとどめましょう。第一に、教科書的な説明では、「キリスト教中心の中世に反対して、人間の価値と尊厳を訴えた思想家たち」ということになっていて、それはたしかに間違いではないのですが、人文主義者のチャンピオンであったエラスムスは、カトリックの司祭でありました。「キリスト教的人文主義者」という連語は、決して形容矛盾ではありません。第二に、ヒューマニズムという語から、彼らの教養が人文学一辺倒であったような印象を与えますが、実は数学・自然科学分野のギリシア語文献の発掘や注目が、彼らの偉大な仕事のひとつであったことを忘れてはなりません。ディオファントスの発見や翻訳は、近世の数学の発展に大きく貢献しましたし、15世紀に再発見されたルクレティウスの『事物の本性について』は、16世紀の後半には近世原子論の重要なソースとして活用されます。第三に、この点は唯一、「人文主義者」の定義としてあまねく妥当なことですが、ギリシア語に通じ、原典を通して物事を実証しようという態度を身に付けていたことです。スコラ哲学を大成したトマス＝アクィナスは、ギリシア語はできませんでした。それに対して、エラスムスは、それまでヒエロニムスによる古いラテン語訳に頼っていた聖書読解を、ギリシア語原典にまで遡り、さらにギリシア語原典からの新訳を世に問うたのでした。

このような「人文主義者」たちの態度から私たちが学ぶことができるのは、ギリシア語（外国語）を通してわれわれとは異なった「他者」の思考を学び、その思考を武器に粘り強く事柄そのものに即する、そのような身構えであります。ギリシア語を学ぶのは、たんに未知の文献を読解するというだけではなく、権威を脇において直接原典に当たろう、自分たちの馴染んでいるパラダイムの外部において思考しようという、批判精神の表れでもあります。他方で彼らは、ギリシアの遺産に盲従したわけではありません。ギリシアの文物がキリスト教以前のものであること、そしてキリスト教文明を通して自分たちが得ることのできた果実がそれなりに豊かなものであることに、じゅうぶん自覚的でした。ですから彼らのテキストを読むと、現代人にはどこか態度が煮え切らないように映ります。あなたの立ち位置はどこなのかと問いたくなります。しかしそのような問いかけは、おそらく人文主義者たちにとっては、忌避すべき党派的振る舞いであったように思われます。一見したところ「ぶれ」ているように見える彼らの言動も、よく読んでみると、熱しやすい現実に対して、バランスをとろうとしていることが分かります。当時は活版印刷が爆発的に広がり、いわ

ば情報のインフレーションが起きた時代です。宗教改革が成功したのは、活版印刷に乗って、ルターたちの文書が大量に流布して、熱しやすい大衆を動員せしめたことにも一因があります——こうした状況は、情報への相互アクセスを飛躍的に高めたインターネットの発展が、社会を再部族化し、ネット上で同じコミュニティに属する人たちを熱狂させ、時には集団ヒステリーとも思われる行動にまで彼らを駆り立てることさえある現代を彷彿とさせます——。そのような状況の中、カトリックの腐敗を告発したエラスムスは、宗教改革を準備したと言われながらも、ルターとは袂を分かち、過激に向かう一派を諫めました。一方の党派に属してその言説を鍛え上げることは決してやさしいことではありませんが、複数の党派の間でバランスをとるのは、その双方の言説に精通しなければならぬふんだけ、いっそうの教養が求められるのです。私はここに、現代が求める教養の理想を見出します。情報の爆発の中で、堅実な基礎的（語学的、科学的）能力をベースに、信頼のおける良質の資料を自らの力で選び取り、事柄に即して粘り強く思考する態度、これこそが現代の教養教育を通して身に付けるべきスキルだと思われまます。そしてこうしたスキルは一生涯をかけて獲得するものであるとはいえ、そのための基礎的訓練は、精神が軟らかいけれどももはや軟弱ではない、18、9歳にふさわしいものであると考えます。

4. 最後に、自由七科

人文主義者に倣うのならば、私はスコラの教養に対しても、一定の理解を示す必要がありましよう。人文主義者に批判されたスコラの教養ですが、その黎明期はやはり瑞々しいものであったことでしょう。その瑞々しさは「自由七科」という言葉そのものにも現れているように思えます。自由七科のことをラテン語で *artes liberales* といい、この理念そのものはおそらくプラトンにまで遡ります。しかし、中世の *libertas* やその形容詞の *liberalis* は、キリスト教神学の文脈においては、神意に従うことで「解放される」という意味を持っていました。私たちは諸々の人生の重荷を背負って生きていますが、神意に従うことができれば、すべてのことを従容と受け入れて心の重荷から解放されることでしょう。こうした心の在り方のことを、彼らは自由であると考えたのでした。自由七科にも同じことが言えます。私たちは子供のころからさまざまな偏見に取り囲まれて生きています。そうした偏見から「解放」されるには、一度は体系立った知識を学ばなければならない、その知識は私たちの思考を「自由」にしてくれるだろう、というわけです。

たしかに「教養」は私たちにある種の「型」を与えます。しかしその「型」は、私たちに重荷ではなく、自由を与えるものである、そのような教養教育を構築できればと願っています。